



目 次

旧制第四高等学校（四高）開学120周年	
四高開学120周年記念展示 ～学都金沢と第四高等学校の軌跡～	2
「四高」展をふりかえる（本康 宏史）	4
四高時代の思い出	
「生涯の教師をえた四高時代」（宮本 憲一）	6
「金沢は壁から謡が洩れて来る」（高橋 治）	8
四高展ポスターこぼれ話	10
本学教員著作等寄贈図書リスト（2006年 6月～10月）	10
図書館のトピックス	12
としょかん日誌（2006年 6月～10月）	12



四高開学120周年記念展示開幕式

四高開学120周年記念展示 ～学都金沢と第四高等学校の軌跡～

開催の経緯

旧制第四高等学校の開学120周年を記念して、平成18年10月16日より、金沢大学資料館および石川近代文学館を会場として、特別展「四高開学120周年記念展示 ～学都金沢と第四高等学校の軌跡～」が開催されました。

金沢大学の前身校である旧制第四高等学校の歴史は、明治19（1886）年の第四高等中学校の金沢誘致に始まります。この高等中学校の誘致にあたっては、近隣県との激しい誘致競争が繰り広げられましたが、石川県では地元の並々ならぬ熱意があり、県民から多額の寄付金も寄せられました。その結果、金沢に第四高等中学校の設立が認可され、明治20年10月26日に開校式が挙行されました。

明治27（1894）年には、高等学校令の公布により第四高等学校と改称します。その後、昭和25（1950）年3月にその歴史を閉じるまでの60年余りの間、「四高」は「学都金沢」を象徴する存在でした。

今回の展示は、学都金沢のシンボルであった第四高等学校の歴史を振り返るとともに、四高を支えた金沢という街とのつながりにも注目し、現在の金沢大学と地域との関わりを考える機会となるよう企画されました。

展示内容

今回、初の試みとして、金沢大学資料館と石川近代文学館の二会場での展示を実施しました。二会場で展示を行ったことは、準備の面では相当な負担を強いられましたが、それぞれの会場で特色ある展示ができ、多くの方々に来場いただくことができました。

金沢大学資料館では「第四高等学校の教育と学問」をテーマにした展示を行い、教科書・ノート類、掛図、標本類、考古資料、物理機器など授業に関連した品々を中心に展示しました。また、当時全国の高等学校の中でも有数のコレクションであったといわれる四高蔵書からは、第四高等中学校開校時に市民より寄贈された「Encyclopaedia Britannica [9th ed.]」をはじめ、四高教授であった哲学者西田幾多郎が手にした図書などを出品しました。



資料館展示会場

石川近代文学館会場では、従来の四高記念室を再構成し、四高の歴史・人物、部活動、街と四高生などをテーマとし、四高に関するさまざまな資料が出品されました。中でも、今回はじめて紹介された文豪井上靖の成績表が注目を集めました。その他、寮日誌や部活動の記録など、当時の学生生活を彷彿とさせるものが多く展示されました。また、第四高等学校の校舎であった石川近代文学館を会場としたことで、四高の歴史をより肌で感じてもらえたものと思います。



石川近代文学館展示会場

開催結果

来場者数は、金沢大学資料館会場（10月16～29日）では合計1,179人、石川近代文学館会場（10月16～23日）では合計1,387人という、両会場ともに予想を大きく上回る結果となりました。特に、四高同窓会の記念式典等が行なわれた21・22日には、多くの四高同窓生が近代文学館会場を訪れ、当時の学校生活の貴重なお話を聞くこともできました。

当初、二会場での展示は準備にかかる負担が大きすぎるため、近代文学館のみを会場とする案もありましたが、金沢大学において展示を行なうことで、学生に自分の学ぶ大学の歴史に親んでもらうこと、さらには市民や四高の卒業生の方々に金沢大学へ足を運んでもらい、今の金沢大学を知ってもらいたいということで、金沢大学資料館での展示も行なうこととなりました。

現在の金沢大学は、交通アクセスの面でかなり不便な環境にあるので、来場の便宜を図るため、会期中の10月21日・22日に、金沢大学～石川近代文学館～金沢駅の間に無料シャトルバスを運行しました。無料バスの利用率については課題が残る結果となりましたが、無料バスがあったために金沢大学会場へ来たという方もおり、それなりの成果がみられました。

来場者に実施したアンケートでは、展示内容について概ね好評をいただきました。「教育・文化遺産として、いつまでも大切に保存、普及

してほしい」というご意見に応じてゆくことは、まさに今後の大学の責務であると思われま

展示を終えて

今回の展示は、準備期間が短かった上に、二会場での開催、また通常業務の傍ら資料調査・展示準備を行なうというハードなもので、開催できたということに驚いているのが正直なところです。四高同窓生の方や歴史を学んでおられる方々から見れば、勉強不足であらぬ多い内容であったとおしかりを受けることばかりですが、歴史ある「学都金沢」の貴重な資料を未来へと引き継いでいくために、今後も努力していきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の展示を実施するにあたり、ご協力をいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

今回の展示は、かなざわ・まち博2006特別企画「学都の心を再び」の一環として、金沢大学附属図書館・金沢大学資料館が、かなざわ・まち博2006開催委員会との共催で開催しました。

四高展 WG 池上 佳芳里



「四高」展をふりかえる

石川県立歴史博物館学芸専門員 本 康 宏 史

【意欲的な記念展】

10月下旬「四高開学120周年記念」事業の一環として「学都金沢と第四高等学校の軌跡」展が開催された。今回の企画に些か協力した立場から、同展の感想をとどめておきたい。まず、第1会場は、石川近代文学館の四高記念室を部分的にリニューアルした形となった。印象としては、従来の展示に比べ明るくなり、好感がもてた。歴代校長の事跡や四高界隈の店舗のようすなど、興味深い情報が随所に紹介され、寮歌のBGMも効果的であった。第2会場の金沢大学資料館も、展示室としての制約があったものの、教科書や教材が手際よく展示されていた。説明も適切で理解を大いに助けた。ことに、エンサイクロペディア・ブリタニカの書棚などは、レトロな雰囲気醸し出していた。両会場とも、西田幾太郎の購入希望書リスト、西田・鈴木大拙・藤岡作太郎の成績が並んだ初期の要覧、中野重治が検閲を受けた「北辰会雑誌」のマイヨール版など、「新出」資料や興味深い展示品が少なくなかったことも特筆しておきたい。

つぎに、多少気になった点を一、二あげておく。第一に、個人的な興味もあるのだが、「四高の校舎」そのもの、つまり建築に関する展示が薄かったように思う。「四高」といえば、まず重要文化財の「本館」を思い浮かべるのは同窓生ばかりではないだろう。巷間、同建築の活用問題に対して議論もある。もちろん、展示でそうした問題を云々する必要はないが、基本的な情報提供として、本館あるいは諸建造物が建築史的にどのような特徴と意味合いを持っていたか、という視点も意味があったのではないか。

現に、四高の建物に関しては、100点を超える建築図面が残されており、本館のみならず、明治村移管の物理化学教室や武道場「無声堂」も含め、充実した展示が可能であったように思われる。あるいは、件の明治村の創設自体が、近代化遺産の保存をめぐる、建築家谷口吉郎と土川元夫（名鉄会長、四高同期生）の発想だったことを紹介するだけでも、活用問題をめぐる共通認識を示すこともなっただろう。

第二に、この企画が、「学都金沢」をタイトルにかける以上、「学都」の視点に、もう少し意識的であってほしかった。周知のように、「学都金沢」の「都市イメージ」の内実は、確かに四高がその核になっていたものの、高等教育機関としては、医科大（医専）や高等工業、高等師範学校などの存在も大きく、新制金沢大学もこれら多くの学校を前身校としている。もちろん、四高会場の「街に暮らす四高生」コーナーでも、「塾」の制度や市民との交流エピソードが紹介されていたが、より幅広い「学都金沢」の歴史的構造的な特色が、展示として強調されてもよかったのではないか。このテーマでも資料は、各校の文書や器物が豊富に残存する。

とはいえ、これら、ないものねだりの要求を満たすためには、当然、展示スペースの確保が必要であった。少なくとも四高会場では、近代文学館の協力が得られれば、ある程度、可能であったかもしれない。しかし、実はこの点がネックでもあったようで、詳細は省くが、四高記念室の施設管理上の曖昧さが、実は桎梏にもなっていたようだ。

【展示を契機に】

今回の展示を通じて、そうした今後の課題も明らかになった。まず、豊富な資料が展示されたにもかかわらず、逆に、個々の資料の内容や来歴の調査が、意外に疎かにされてきたことが分かった。四高関係資料に関しては、筆者作成の仮目録をベースに、金大の五十年史編纂室が詳細な所在目録を刊行している。しかし、もともと記念室開設の準備段階で、きちんとした「調書」が作成されなかったため、今となつては、個々の資料自体の情報と聞き取りにもとづく、「素性調べ」の作業が不可欠な状況である。この間、図書館・資料館スタッフの献身的な努力で、多くの新知見が加わったものの、まだまだ確認しなくてはならないことは多い。その点、多くの四高関係者が集った今回は、格好の調査機会でもあった。とくに四高から金大への移行期の事情など、卒業生（最年少でも70歳代後半）を中心に、今のうちに聞き取る必要がある。

一方、調査が進んでいると思われる資料でも、より考証が必要なものもある。例えば、金大会場の「目玉」の一つであった、「E・ブリタニカ」。解説によれば、「明治20年10月26日の第四高等学校開校にあたって市民より寄贈されたもの」で、「扉には、『中屋彦十郎外二百三名寄贈』とある」とされる。しかし、図録に掲載された「扉写真」には、「明治三十五年五月十五日 中屋彦十郎外二百三名寄贈」の「寄贈印」が、はっきりと確認できる。この15年の差は何を意味しているのか。記録が正しいとすれば、この間の事情を明らかにする必要がある。さらに、教材として展示された「渾天儀」。「四高の物理科長西英盛教授（昭和元年まで在任）が、私財を投じた遺愛の品」とされる貴重な資料である。とはいえ、「江戸後期」の木製品にしては、やや状態が良いすぎる印象をもつ。図録では賢明にも「教育用模型」と付されているものの、来歴を含め、引きつづき厳密な検証が求められよう。このほか、「北辰会雑誌」や「南

下軍」,「三々塾日誌」など、四高史を語る上で重要な諸誌は、全文翻刻、あるいは影印による公開（と分析）が待たれるところである。今後の取り組みを期待したい。

ところで、これら諸日誌などには、移管の事情から、年次によって収蔵先が分かれているものもある。いうまでもなく保管活用上きわめて不都合な状態である。四高同窓会が金大同窓会と合体したこの機会に、所蔵関係を整理することも考慮されたい。さらに、今後、卒業生関係者の所蔵資料が順次寄贈されることと思われるが、これを適切に受け入れ、保管する体制も整えなくてはならない。そういう意味では、四高資料、金大史資料の整理、調査、研究に従事する人員の充実が望まれる。現状では、図書館・資料館のスタッフが、日常業務の合間をみて努力されているのだが、果たすべき仕事量からすれば、専任アーキビストの配置も視野に入れたいところである。

最後に、こうした事業・作業にあたっては、人の確保もさることながら、予算の裏づけも大切な要素である。報道によれば、同窓会の基金が四高記念室のリニューアル整備費に充てられる由。であれば、上のような地味（かつ重要）な作業にも、有効な手だてが差し伸べられてほしい。実は、そうした「知的基盤」に根ざした取り組みこそが、「教養」や「教養教育」の復権への真摯な姿勢といえよう。

本康 宏史（もとやす ひろし）

1957年東京都生まれ。金沢大学法文学部卒、博士（文学）。専攻は日本近代史。石川県立郷土資料館学芸員を経て、現在石川県立歴史博物館学芸専門員。編著書に『実録石川県史』（能登印刷出版部）、『石川県の歴史』（山川出版社、共著）、『軍都の慰霊空間 - 国民統合と戦死者たち -』（吉川弘文館）など。

生涯の教師をえた四高時代

滋賀大学名誉教授 宮本 憲一

四高時代は食糧難で、貧しい生活をしていましたが、精神は高貴なものでした。私は出席日数不足で1年生の時に落第しているのですが、理科乙類（ドイツ語専攻）に3年、文科乙類（ドイツ語専攻）に1年在学しました。当時は理科学も文科学と同じように哲学や文学に耽溺し、顔をあわせると論争をしていました。旧制高校は入学はきわめてむつかしかったのですが、その定員は国立大学の定員を下廻っており、むつかしい学部をえらばねば、進学できました。私たちの学年は旧制の最後の試験で稀にみる激戦となったので、希望大学に入学できない生徒もでてきたのですが、それでも全学で私立大学にはいったのは1人ですから、めぐまれた状況だったといつてよいでしょう。このため、飯沢匡のように、高校生活は秀才をバカにするところで、受験勉強をせずにおおいに青春をたのしんだものです。

四高時代の最高の経験は、すぐれた教師によって教養をつけたことです。私は理科学時代に東洋史の慶松光雄先生の日本美術史と東洋美術史の講義を2年間きくことができました。慶松先生の講義は一風かわっていて、すぐれた作品をもってきて、「これはよいだろう」といって、生徒に長い時間鑑賞させるのですが、あまり説明をしないのです。この講義のやり方がわからない生徒はサボりはじめるのですが、その作品をよくみていると次第に感動して、これはすぐれたもので、この作者はどのような履歴であるのか他にどのような作品があるのかを自発的に調べたくなるのです。慶松先生は、東京大学と京都大学の薬学部を創設した慶松勝左衛門の御子息で、実に立派な美術作品をもっておられ、その本物をもってきてみせてくれるのです。手にとってみたり、近くでみるものですから、作品のよさが次第に解ってくるのです。こういう贅沢な講義を聞いている中に次第に鑑賞眼が養われ、美術にたいする畏敬の念がでてくるのです。

慶松先生は戦時中、教え子が招集をうけ軍隊に入営するためにあいさつにくると、必ず「生きてかえれ」といわれ、とっておきのウィスキーで乾杯して見送ったそうです。残念なことに生きてかえられず特攻隊で死んだ高知県出身の生徒が遺書に慶松先生に墓碑名を書いてほしいとのこしていたことを父親から聞いて、先生は長い時間をかけて、韻律のある碑文をつくられました。そして、東京の青山にいて、石の彫り方について学び、それを四国の石工につたえ、立派な墓碑をつくられたのです。こういう生徒が死んでからも面倒をみるような教育者が四高にそろっていたということが、この学校に学ぶ生徒に真の学問のあり方、それを学ぶところがまえを教えたのでないでしょうか。

これもすでに他の著書に書いたことがあるのですが、四高の教育をしめすものとして紹介したいと思います。旧制高校は外国語学校のようなものでしたから、文科の場合、第1外国語が1週9時間、第2外国語が6時間という時間割でした。四高の語学の先生は、すぐれた文学者が多く、岩波文庫の外国文学翻訳者がずらりと並んでいました。四高の最後の校長で、ケラーの翻訳者の伊藤武雄先生は、ドイツ語の時間はドイツ語以外をしゃべらせない厳格な教師でした。しかし映画や演劇の批評家としても一流でした。私は金沢大学の教師となってから、一緒に映画評をしたり、親しい関係になるのですが、学生時代は怖い先生でした。

金沢大学の教師になってからのことですが、有斐閣から1963年に最初のデビュー作である『地方財政』という著書を柴田徳衛さんとともに出版しました。その冒頭にこの本のエッセンスとして「足もとを掘れ そこに泉涌く」ということばを記しました。柴田さんはこれは一高時代にゲーテのことばとして習ったというので、そのように書いたのですが、私は自信がありません。それで伊藤先生のところへ行って、「こ

れはゲーテでしょうか」といったところ、先生は「君にそういう風に教えたかね。私は記憶がない。ひまの時にしらべておこう。」といわれました。

私はこのたのみのことをすっかり忘れてしまい、そのうちに大阪市大の教師へ転職しました。それから10年ちかくたって、伊藤先生から手紙がきました。「ゲーテ全集を全部あたってみたが、該当する詩はない。しかし、さいきん、秋山英夫さん（これも四高のドイツ語教師でその後学習院大教授になる）からおくられてきたニーチェの詩集をみたら、これと思われるものがあった。原文にあたって訳してみたので、それを送る」とありました。たのんだことを忘れていた怠惰な教え子をふるえあがらせるようなありがたい手紙です。その詩は次のようでした。

「足もとほれば泉

痴人（しれびと）はいう そこは地獄」

これはモダンな横浜っ子でありながら金沢を愛して、生涯を金沢でくらし先生の信条のようでした。これは私にとって座右の銘です。

私は四高生が生涯四高を愛し、金沢を第2の故郷としているのは、こういうすぐれた教育者に教えられた青春の遺産ではないかと思うのです。

宮本 憲一（みやもと けんいち）

1930年台北市生まれ。旧制四高、名古屋大学経済学部を経て、京都大学経済学博士。金沢大学助教授、大阪市立大学教授、同名誉教授。その後、立命館大学政策科学研究科長を経て滋賀大学学長を務める。現在同大学名誉教授。環境を経済学の中に位置づけ、公害問題に取り組んだ。著書に『環境経済学』『環境と開発』（岩波書店）ほか多数。平成18年度「京都新聞文化学術賞」を受賞。



四高三人像（石川近代文学館）

『金沢は壁から謡が洩れて来る』

高橋 治

こんな川柳「金沢は上から謡が降って来る」。同種のもので「金沢に屋根から謡が降って来る」というのもある。

私は無教養で謡に関しては全く心得がない。だが植木の天辺や屋根の上で仕事をしている金沢の職人が、謡を口ずさんでいる光景なら、いかにも金沢らしいもので、ごもつともと賛成の意を表する。

しかも、日本広しといえども、金沢以外にこんな町はないだろう。

植木屋や屋根職の口から特に異様な感もなく謡が洩れてくる。それはどんなことなのか。もつともらしい方をすれば、この町をすつぱりとくるみこんでいる文化の広さだといえそうだ。あるいは深さといひ換えても良いのかも知れない。

その謡に関して、金沢の人々を必要以上に刺激するかも知れないが、金沢には加賀宝生という呼び方があり、東京ではそれを田舎宝生といった。花のお江戸が文化の中心だといわんばかりの、いわれなき思い上がりである。ことほど、現在、日本の文化全般に関し、金沢があつてこそ水準が保たれているものがどれだけあることが。東京が「花の」と浮かれている中に、様々の分野で逆転現象が起ってしまったのである。金沢の文化地位が上がった。

少々、話が本筋から外れた。私が謡に関していいたかつたのは、私の場合、屋根から降って来るのではなく、壁越しに隣家から聞こえて来るといふ話だつたのである。

このことに関し、なに分にも欲が無かつたのだらう、聞こえてくる謡を習おうという気持ちにはならなかつた。それでも、いくつか好きな謡本は古本屋で買って来て、壁越しに耳を傾けたりしていたものだ。

これは、つまり、金沢時代私が厄介になつた家が、謡の師匠の隣家だつたということなのだ。屋根から降るどころか、謡にどつぷり漬かつて毎日を暮らしていたといつても良いほどであつた。なぜそんなところに部屋を借りたのかだが、これには、金沢でなければ考えられないいきさつがある。

金沢には市中を流れる二本の川があつて、男川と呼ばれる犀川、女川といわれる浅野川の二本であることは誰もが知つている。しかも、男女と対比されるくらいだから、両者の景観から周囲の景色まで全く違つている。

その女川の印象を豊かに持つた作家が泉鏡花である。私が旧制中学を千葉で終えて、次の進学先に金沢を選んだ最大の理由は、金沢が鏡花の故郷であることへの憧れである。金沢の郊外に特設された寮で一年、金沢城の中に建てられた第九師団の兵舎を寮に使つて半年を過ごし、その後私は町中に住んでみたくて下宿を探すことに決めた。

昭和二十四年の秋口である。金沢は戦災を受けなかつた数少ない町のひとつだつたから、戦前の日本の生活様式がまだ豊かに残つていた。だから、住宅事情の厳しさを反映するような不動産屋があつたかどうか、記憶が確かではない。仮にあつたとしても、市中の盛り場、香林坊や片町にあつたとは考えられない。また、あつたとしても、極度に貧乏学生だつた私には、権利金、敷金、礼金などといった余分な費えを払う金力があるうはずもなかつた。

といつて、国土の大半を焼かれました日本なのだ。無事に戦争の中をやり過ぎした金沢とはいへ、戦前の日本にあつたような「貸家」という札が斜めに貼つてある光景も見当たらない。そこで、この町と目標を定め、一軒一軒、貸してくれる部屋はないかと聞いて回ることにした。

無茶もいところの話である。しかも、その目標なるものを、鏡花が生まれ育つた女川河畔と、香林坊にあつた学校（第四高等学校）の中間あたりと、勝手に決めてしまった。いうまでもなく、第一の目的は通学、第二の目的は、鏡花の故郷の空気に触れて暮らすことである。

今にして、しみじみと思いだして、胸に暖いものがこみ上げて来るのは、次々と一軒ずつ紹介もなしに回って歩いたのに、厭な思いをさせられたことが一度もなかったことなのだ。相手に出てきた側にも、途方もない無茶な加減をとがめる様子は全然なかった。

変ないい方になるが、四高生が身を包んでいた黒いマントの威力なのだ。先方が盲目的に抱いていた期待にどれだけそうことが出来たかは大いに疑わしいのだが、金沢市民には一種の幻想があった。四高生はいまはまだ苦学生に身をやつしているが、いつかは帝国大学を卒業して、世の中のために立派な仕事をしてくれる。

市民一人一人が、どうも錯覚と善意にみちた期待を持ってくれていたのではなかるうか。これはかなり根の深い問題で、「天下の書府」と呼ばれた北陸の一大雄藩に、他の諸藩が遠く及ばなかったのは、学ぶ価値を極度に高く置いたことと関係がありそうだ。それが明治期に入って、第四高等学校の生徒に対する親しみに受け継がれて行く。

だから、私も三年間金沢にいた間に、どれだけこの金沢市民の好意的な視線の中で、のびのびと生きたか計り知れないものがある。決して、それに甘えて良いとは思っていないのだが、「四高の生徒さんのやることやさかい」と、大抵のことに寛容に見まもってもらえたものだった。

実は、問題の下宿探しも、そんなところに端を発している。その目的の町でも、四高の生徒さんがやることだからと、住民も真面目に相手をしてくれた。それどころか、自分のところに貸せる部屋はないが、あの家なら老夫婦だけだからとか、子供がまだ小さいから勉強の邪魔になりませんかとか、様々な好意的な情報を与えてくれた。

結局、老夫婦と子供二人を抱えた出戻りの女性が住む家で、二階の十畳の座敷を貸してくれることになった。しかも、切腹用の部屋だといわれる長四畳がついた立派な座敷だった。こうして、私は鏡花が呼吸して育った浅野川近くの住民になる。

住みついて間もなく、部屋探しに一軒一軒訪ねた家々の人たちが、私のことを覚えていてくれることに気づかされた。挨拶の親しさと、「部屋があつて良かったですね」といわんばかりの微笑に、暫時はこの町の住民だという一種の承認がこもるのである。

こうして住みついた謡の師匠には、美しくしかも可愛い十八、九の娘さんがあった。人の縁などというものは、良い方向に転がり出すと、次から次に意外な展開を見せるもので、このお嬢さんが四高に勤めていた。しかも、気さくで美貌で鳴る人だったから、人気が高い。

その上、この人の仕事の中に生徒の出欠簿の整理が入っていた。私は成績不良で落第しかけたし、小説を読みにも図書館に入りびたり、放課後は野球部の練習に打ちこむといった毎日で、少し暇があると映画館に走りこむ。学校の勉強に打ちこむ時間などなかった。出欠簿も欠席を示す斜線ばかりが並んでいる。

そのままでは出席日数不足で落第する。それを救ってくれたのが、隣家のお嬢さんだった。消しゴムで適当な時間数に合せてくれる。

これは有難かった。思えば良い町に下宿して、多くの良い人にとりまかれていたのだ。

金沢は壁から謡が洩れて来る。

高橋 治（たかはし おさむ）

一九二九年千葉市に生まれる。旧制四高、東京大学文学部を

卒業後、松竹に入社し映画監督と脚本の執筆活動に入る。

その後同社を退職し本格的な執筆活動を開始。

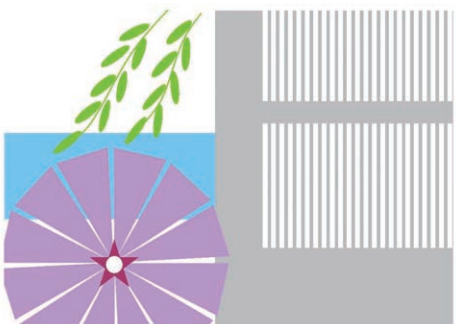
泉鏡花記念金沢市民文学賞（『派兵』七七年）

直木賞（『秘伝』八四年）

柴田錬三郎賞（『分かれてのち恋歌』『名もなき道を』八八年）

吉川英治文学賞（『星の衣』九六年）を受賞。

現在（財）白山麓僻村塾特別顧問。



四高展ポスターこぼれ話

今回の記念展示は距離の離れた2会場で開催するというこれまで経験したことのない大きな企画で、9月末ともなると、ワーキンググループのメンバーは、それぞれ割当てられた作業に追われていました。その数日前には、中央図書館の職員総動員で四高同窓生約2,000名をはじめ、近隣の図書館や公民館にポスターやチラシの配布を終えてはいましたが、準備の遅れはどうしようもなくメンバーの間には不安が広がっていました。この記念事業のポスターとチラシは『写真集旧制四高青春譜』(第四高等学校同窓会、1986)中の「ポートレースの応援団」から採った、四高生たちが何かを呼びながら街中を闊歩している写真をデザインしたもので、図書館内にはこの大きなポスターがあちこちに貼ってありました。このポスターを見て「この町並みはどこ?」「この人たちは何を叫んでいるの?」というような疑問の声も聞かれていたちょうどその頃、横浜にお住まいの向井覚様から資料館に届いた手紙はまさに「天からの贈り物」でした。【チラシの写真を拝見し、懐かしさのあまり、ひとこと蛇足をもうしあげます】から始まるその手紙には、写真に写っている向井様ほか7名の方のお名前と、この写真が写された状況の説明がありました。

【昭和14年5月28日に行われた文理科対抗ポートレースの日、理科甲類3組が絶対優勝するぞと応援団を結成、全員羽織袴で統一し、扇子や応援旗を持って大野川に駆け付けたのですが、試合は緒戦で簡単に敗れ

てしまった。金沢駅前でのまま解散するわけにはいかんぞということで、校門まで寮歌を高唱しながら、街頭ストームだと衆議一決、校門まで無我夢中で行進した】。

場所は安江町。疑問は一気に解けたと同時に、こんなにも懐かしく思ったださる方がいるのだと、メンバー一同あらたな元気をもらい、無事開催にこぎ着けたのでした。

ちなみに、この8名の方々は、東大や京大などを卒業後、各界で活躍されています。



吾永久に緑なる
(写真は向井覚様からお送りいただきました)

四高展 WG 野村 洋子

ありがとうございました

本学教員著作等寄贈図書リスト

2006/06 ~ 2006/10

藤村政樹 (大学院医学系研究科助教授) 共著

慢性咳嗽の診断と治療に関する指針

2005年度版

前田書店 2006 .2

(医図書 WF143:M286)

橋本哲哉 (副学長・理事・社会貢献室長) 編

近代日本の地方都市:金沢/城下町から近代都市へ

日本経済評論社 2006 .5

(図開架214 .3 :K51)

永坂鉄夫 (名誉教授) 共著

医学用語。その批判的脱構築

診断と治療社 2006 .4

(図開架490 34:O34)

(医図書 W15:O34)

上田正行 (文学部教授) 著

鷗外・漱石・鏡花:実証の糸

翰林書房 2006 .6

(図開架910 26:U22)

- 仲正昌樹 (法学部教授) 著
 デリダの遺言
 双風舎 2005 .10
 (図開架104:N163)
- なぜ「話」は通じないのか:コミュニケーションの不自由論
 晶文社 2005 .6
 (図開架361 .45:N163)
- 日本とドイツ二つの全体主義:「戦前思想」を書く
 光文社 2006 .7
 (図開架309 .021:N163)
- 石橋弘行 (大学院自然科学研究科教授) 共編
 創薬科学:生体構成分子から見た医薬品
 広川書店 2004 .11
 (図開架499 .3 :S731)
- 結城正美 (外国語教育研究センター助教授) 共編
 越境するトポス:環境文学論序説
 彩流社 2004 .7
 (図開架910 26:E36)
- 小林宣泰 (名誉教授) 著
 「研究方法」入門:アイデアを研究にするための13の講義
 協同医書出版社 2006 .6
 (医保図書室407:K75)
 (図開架407:K75)
- 岩坂泰信 (自然計測応用研究センター教授) 著
 黄砂:その謎を追う
 紀伊國屋書店 2006 .3
 (図開架451 .5 :I96)
- 森 雅秀 (文学部助教授) 著
 仏のイメージを読む:マンダラと浄土の仏たち
 大法輪閣 2006 .8
 (図開架186 .8 :M854)
- 松平光男 (教育学部教授) 共著
 科学的視点から捉えた生活文化論
 さんえい出版 1991 .4
 (図開架590:K13)
- わかりやすい高分子化学
 三共出版 1994 .4
 (図開架431 .9 :W146)
- 21世紀のテキスタイル科学:人と環境との関わり
 日本繊維機械学会 2003 .3
 (図開架586:N691)
- 足立英彦 (法学部助教授) 著
 Die Radbruchsche Formel : eine Untersuchung der Rechtsphilosophie
 Gustav Radbruchs
 Nomos 2006
 (図書庫321 .1 :A191)
- 村上清敏 (文学部教授) 共訳
 山本 卓 (教育学部助教授) 共訳
 おしりに口づけを
 岩波書店 2006 .8
 (図開架933:H373)
- BITTMANN HEIKO (留学生センター助教授) 著
 Die Lehre des Karatedo:空手道
 Verlag Heiko Bittmann 2000
 (図留学生789 .2 :B624)
- The teachings of Karatedo:空手道
 Verlag Heiko Bittmann 2005
 (図留学生789 .2 :B624)
- 細見博志 (大学院医学系研究科教授) 共同執筆
 生命倫理:21世紀のグローバル・バイオエシックス
 北樹出版 2005 .10
 (医保図書室490 .15:S158)
- 細野隆次 (大学院医学系研究科教授) 共同執筆
 スタンダード生化学
 文光堂 2004 .3
 (医図書 QU 4 :S965)
- 加藤和夫 (教育学部教授) 共同執筆
 [現代方言の記述に基づく方言学習教材作成のための基礎的研究] :みんなで学ぼう! 大聖寺ことば
 金沢大学教育学部国語教育講座2006 .3
 (図開架818 .43:G325: 2)
- [現代方言の記述に基づく方言学習教材作成のための基礎的研究] :みんなで学ぼう! 鶴来ことば
 金沢大学教育学部国語教育講座2006 .3
 (図開架818 .43:G325: 3)

図書館のトピックス

中央図書館閲覧ホールで展示会を開催

本学教員著作図書展（7月18日～8月31日）
図書館が所蔵する本学教員の著作図書約500冊の展示を行いました。本学教員等の著作を一斉に展示したのは今回が初めて。

石川知学展（10月1日～11月19日）
石川県の文化や歴史に関する資料を展示しました。能登紀行で知られる天文学者「パーシバ

ル・ローエル」コーナーや、「四高開学120周年記念展示」に併せて「四高」コーナーも設置しました。



石川知学展

としょかん日誌（2006年6月～10月）

- 6月1日 第27回 EDC セミナーに参加(東京大学), 橋 美穂(相互利用係長)
- 6月8日 国立情報学研究所オープンハウスに参加(学術総合センター)内島秀樹(情報企画課副課長)
- 6月9日 平成18年度石川県大学図書館協議会定例会議及び講演会に出席(北陸学院短期大学)村田勝俊(中央図書館係長)
- 6月19日 平成18年度漢籍整理長期研修に参加(東京大学)村田勝俊(中央図書館係長)
- 6月28日 第2回国立大学図書館協会マネジメントセミナーに参加及び第53回国立大学図書館協会に出席(学術総合センター)鹿島正裕(図書館長), 鈴木太郎(情報サービス課長)
- 6月28日 第53回国立大学図書館協会に出席(学術総合センター)由良信道(情報部長), 木下 聡(情報企画課長), 鈴木太郎(情報サービス課長)
- 7月3日 平成18年度大学図書館職員長期研修に参加(筑波大学)守本 瞬(医学部分館係長)
- 7月4日 ライブラリ・コネクト・セミナー2006に参加(千里ライフサイエンスセンター)押見智美(コンテンツ第二係長)
- 7月6日 国際ラウンドテーブル会議に出席(金沢工業大学)鈴木太郎(情報サービス課長), 橋 洋平(情報企画係長)
- 7月8日 平成18年度東海北陸地区国立大学法人等職員採用事務系(図書)第二次専門試験監督業務(名古屋大学)木下 聡(情報企画課長)
- 7月11日 平成18年度次世代学術コンテンツ基盤共同事業委託事業説明会出席(学術総合センター)内島秀樹(情報企画課副課長)
- 7月21日 機関リポジトリ構築のためのシステム説明会に出席(国立情報学研究所)内島秀樹(情報企画課副課長)
- 8月3日 平成18年度電子ジャーナル地区説明会に出席(新潟大学)押見智美(コンテンツ第二係長)
- 8月3日 平成18年度第3回「学術コンテンツ運営・連携本部機関リポジトリ作業部会」に出席(学術総合センター)木下 聡(情報企画課長)
- 8月28日 講演会「デジタル時代の知的財産保護と知る権利」に出席(米国大使館)由良信道(情報部長)
- 8月30日 平成18年度目録システム講習会(図書コース)開催及び受講(金沢大学)野田晶子(医学部分館係), 川井奏美(自然科学系図書館係), 綾井利佳(コンテンツ第一係)
- 9月4日 平成18年度漢籍整理長期研修に参加(東京大学)村田勝俊(中央図書館係長)
- 9月20日 目録システム講習会(雑誌コース)に参加,(岡山大学)伊川麻里子(コンテンツ第二係)
- 9月26日 業績 DB に関する打合せ(早稲田大学附属図書館)内島秀樹(情報企画課副課長), 橋 洋平(情報企画係長)
- 9月26日 第2回「デジタル・リポジトリ国際シンポジウム実行委員会」及び平成18年度第4回「学術コンテンツ運営・連携本部機関リポジトリ作業部会」への出席(学術総合センター)木下 聡(情報企画課長)
- 9月28日 平成18年度北信越地区国立大学図書館研修会に講師参加(富山大学)橋 洋平(情報企画係長)
- 9月28日 平成18年度北信越地区国立大学図書館研修会に参加(富山大学), 野見山敦史(コンテンツ第一係), 伊藤美和(コンテンツ第一係), 野田晶子(医学部分館係), 川井奏美(自然科学系図書館係)
- 10月2日 平成18年度漢籍担当者職員講習会に参加(京都大学)林 裕紀子(コンテンツ第一係)
- 10月5日 Dspace セミナーに参加(日本ヒューレットパカード社), 内島秀樹(情報企画課副課長)
- 10月11日 平成18年度学術情報リテラシー教育担当者研修会に参加(大阪大学附属図書館), 守本 瞬(医学部分館係長)
- 10月16日 Open Scholarship 2006に出席(スコットランド)内島秀樹(情報企画課副課長)

金沢大学附属図書館報「こだま」第161号

発行：金沢大学附属図書館 編集：広報委員会

2007年1月25日発行

〒920-1192 金沢市角間町 電話 076 264-5200

印刷：株式会社 橋本確文堂

ホームページURL <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/>

電子メールアドレス etsuran@ad.kanazawa-u.ac.jp

読者の皆様からのおたよりをお待ちしております。

表題地模様©Toku Yusui(加賀友禅染絵『さやぐ,おどる』。由水十久(初代。1913-1988)は金沢出身の加賀友禅作家です。)